

序論)

さて、今日の箇所は現代人にとって最も受け入れがたい、もしくは理解しづらい  
そういう箇所ではないでしょうか。なぜならば、「女のかしらは男だ」と言ったり、  
「女はかぶり物をしなければいけない」と言ったり、「男の髪が長いと恥ずかしい」  
というようなことが書かれているので、LGBTQ の問題が取り上げられている  
現代においては、とても受け入れがたい、そういう箇所だと思います。

この箇所を理解するためには、当時のコリント教会が置かれていた状況、また課題  
というものを正しく理解していく必要があります。

コリント教会の状況)

今まで何回か説明してきましたが、コリントという町は非常に栄えている町でした。  
しかし、同時に偶像の多い町、さらには、性的に乱れている町でもありました。  
また、現代のフェミニズムの原型ともいえるような男性中心の歩みから脱却  
し、女性にも自由な生き方をする権利があるというような思想が流行り始めていた  
時代でもありました。そのため、当時の女性にとっては一般的であったかぶり物を  
するというをやめて、自由に顔を出して歩いていく、そういうようなことをし  
始めた女性が増えてきた時代でもあったのです。だからコリント教会の中には当時  
のそういった考え方に乗って、自分たちもかぶり物をしないで礼拝しようとしていた  
女性がどうもいたようであります。

しかし一般的に、当時の女性にとってかぶり物とは、婚姻関係の尊重であったり、  
家族の保護下、特に夫の保護下にあることを示す象徴であったり、社会的品位  
や貞淑さをしめすものでした。ですから、かぶり物をしないというのは、結婚の秩序  
に反抗しているとか、夫の保護から抜け出そうとしているとか、性的な秩序から  
外れた乱れた生き方をしようとしているそういう女性であるというイメージが当時  
あったのです。

極端なことを言えば、被り物をしない女性というのは、奴隷階級であったり、不  
倫の罰を受けている女性であったり、神殿娼婦であったり、夫から見放された女性  
というイメージを持たせるものでありました。

だから教会の中で礼拝をするときに、信徒の女性が被り物をしないで礼拝をして  
いるというのは、その人が「神殿娼婦だ」とか、「不倫の罰を受けている」と言っ  
たよ。誤解を周りの人に与え、礼拝の秩序を乱すことになる可能性がありました。

だからパウロはこの箇所で女性にかぶり物をするようにという勧めをしていま

す。今日はこういった前提を踏まえた上でパウロが何を言いたいのかを丁寧に読み解いていき、現代の私たちにこの箇所が何を教えているのかを教えられていきたいと思います。

## 1) かしら（根源、導き手、責任者）の原則

（2 節表示）パウロは最初、コリントの教会の人たちがパウロの教えに忠実に従っていたことを強調しています。多くの問題を抱えていたコリント教会の人たちですが、それでも彼らはパウロが最初に教えてきたことを守ってきました。だから、「今まであなたたちは、私の教えに守ってきたんだから、これから話す事にも従いなさいよ」そう 2 節でいっています。

そして 3 節からが本題となります。

**11:3** しかし、あなたがたに次のことを知ってほしいのです。すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。

ここでパウロは、礼拝者が理解すべき頭の原則を述べています。

箇条書にすると、

- ・男のかしらはキリスト
- ・女のかしらは男
- ・キリストのかしらは神

という原則ですね。

ここでいう「かしら」というのは上下関係的な意味ではありません。むしろ導き手とか責任者、保護者という意味で理解するのが良いと思います。言語的には「頭」というのは指導者という意味もありますが、起源とか源という意味があります。それぞれがどこから出てきて、誰の指導を受けるべきなのかということです。

だからパウロは、男の導き手と源はキリストであり、女の導き手と源は男であり、キリストの導き手と源は神だと、そう言っています。

皆さんご存知のように、【主】イエスキリストと神様は三位一体の神様ですから、もともととは上下関係がなく同格です。でもキリストはこの地上において、神様のしもべとして歩まれました。神様の命令、ご計画、導きに徹底的に従われたのです。「キリストと男の関係、男と女の関係もそういうものだよ」と、パウロは言っています。これは繰り返しになりますが、上下関係を示すものではなく、起源と役

割をしめすものです。神様に創造された者として歩むならば、どこから自分が出てきて、まずは誰に従うべきかということを理解しなさいということです。

もちろん女性もキリストに従うべきですし、神様に従うべきです。けれど、「女性を愛し導く存在として男があなたより先いるのだよ。そういうことを理解しなさい。」ということです。

だから皆さん、いろいろ思うところはあるかもしれませんが、まずは聖書が教える『「かしら」の原則』、誰が自分の源であり、導き手なのかということを理解しましょう。

## 2) かしらを辱めてはいけない

そしてこの「かしら」の原則を理解した上で、続く 4 節から 6 節を読んでみると、今日の箇所が言いたいことがだんだんわかってくると思います。

4 節から 6 節を読んでみましょう。

11:4 男はだれでも祈りや預言をするとき、頭をおおっていたら、自分の頭を辱めることになります。

11:5 しかし、女はだれでも祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていなかったら、自分の頭を辱めることになります。それは頭を剃っているのと全く同じことなのです。

11:6 女は、かぶり物を着けないのなら、髪も切ってしまいなさい。髪を切り、頭を剃ることが女として恥ずかしいことなら、かぶり物を着けなさい。

ここで想定されている場面というのは、「祈りや預言をするとき」です。これは教会で礼拝をするときと理解していいでしょう。

(4 節表示) その上で 4 節でパウロは、礼拝をするときに男が自分の頭を何かで覆っていたら、自分の頭を恥ずかしめることになると言っています。これは単純に男性が被り物をしていると頭が恥ずかしいという、そういうことではないですね。さっきの原則を思い出してみましょう。男のかしらは何ですか？キリストですね。だから「礼拝の場で男が被り物をする、キリストを恥ずかしめることになる」と言っています。なぜ男性がかぶり物をする、キリストを恥ずかしめることになるのでしょうか。それは当時の価値観において男性が被り物することは、自分は男ではなく女であるという意思表示になるからです。「せっかく【主】が男として創造してくださったのに、女性と同じような格好をして男であることを否定する。それは男の導き手であるキリストを恥ずかしめることと同じなんだよ」ということです。

ですから、これと同じ理屈で女性のことを考えてみると（5節表示）今度は当時の常識として、女性ならかぶり物をかぶるのが当たり前な状況の中で、かぶり物を外して男性と同じように振る舞うということは、「女性の導き手であり、責任者として立てられた男性を否定することになり、そしてそれは男性を辱めるのと同時に女性にとっても非常に恥ずかしいことなんだ」と、そうパウロは言っています。

パウロは、この恥ずかしさを当時の人によりリアルに示すために、（6節表示）「もし男と同じようにかぶり物をしないで礼拝の場に来るのならば、髪の毛を切ってみなさい」と言います。

これはですね。当時の女性たちにしてみると、非常に衝撃的な命令です。なぜならば、先ほども言ったように、髪の毛を剃ってしまっていたり、切ってしまっている女性というのは、奴隷だったり、不倫をして罰を受けている女性であったり、神殿娼婦であったり、そういう社会的に目のある人たちがする格好なので、非常に恥ずかしい格好でした。

パウロは、「教会の礼拝という秩序が重んじられる場所で、かぶりものをかぶらないのは、あなたたちが恥ずかしいと思っている女性たちと同じような行動をしている事になるのだ」と、そう言っているのです。

### 3) 自分は何の栄光を現す者として造られたのか

ここまではある意味で消極的な理由によって、かぶりものを被っている女性たちを説得している場面ですが、7節からは積極的な理由をパウロは語っています。

まずは7節を読みましょう。

**11:7 男は神のかたちであり、神の栄光の現れなので、頭にかぶり物を着けるべきではありません。一方、女は男の栄光の現れです。**

ここでは、男性・女性それぞれが何の栄光を表す存在として造られたかということを示しています。男は神の栄光を表すものであり、女は男の栄光を表すものである。とパウロは言っています。これは、誤解しないでいただきたいのは、先ほどと同じで、「女性も神様の栄光を表す存在です」そうなんですけど、神様の創造の秩序、創造の順番から理解するならば、「女性は男の栄光を表す、そういう役割が与えられているんだ」ということです。8節9節では、神様がどういう順番で人をお造りになったのかということを行っていますね。8節9節を読みましょう。

**11:8 男が女から出たのではなく、女が男から出たからです。**

**11:9** また、男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたからです。

読んでわかる通り、男と女が造られた順番が書かれています。創世記をみると、「まずは男性が造られて、男性のあばら骨から女性が造られました。その逆じゃないですよ」とそう言っています。この神様の創造の秩序に従って考えると、男は神様のかたちに造られたものとして、神様の栄光を表すという使命がまず第一に与えられていて、「女性は男の助け手として、男性が栄光を表せるように支えていく」という使命が与えられているということです。

女性に、男性の助け手としての役割があるというのは、決して悪いことではありません。この創世記に書かれている「助け手」という言葉は、神様がイスラエルを助ける時の「助け手」と同じ言葉が、元のヘブル語では使われています。だから女性は「神様の手」として、男性を助ける役割が与えられているということです。女性の皆さん、皆さんは神様の手なのです。神様の手ですから、決して男に劣るものではありません。むしろとても大切な存在だと言えます。

だからパウロは、神様の創造の秩序に従って、その女性に与えられた素晴らしい役割を心に留めていてくださいと、そう言っているわけです。

この役割を理解した上で、女性が礼拝の場でどういうふうに振る舞うべきかという、10 節。

**11:10** それゆえ、女は御使いたちのため、頭に權威のしるしをかぶるべきです。

ここでも理解しがたい言葉が出てきましたね。女は御使いたちのために、これはどういうことかっていうと、聖書の詩篇 138 篇とか、テモテへの手紙 5 章 21 節などを見てみると、「御使い」というのは礼拝の秩序を見守る者、監視する者という、そういう役割がある存在として理解されていました。そのように『礼拝の秩序を守る者の前で歩もうとするときに、女性は自分に与えられた役割、男の栄光を表す、男が主の栄光を表せられるように支えるというその役割を重んじ、男の導きの下にいることを示す「かぶりもの」をするべきだ』という主張です。

大切なのは、男性と女性、それぞれが神様に与えられた役割を実行し、礼拝の秩序を守っていくということです。その状況では、それをするために、女性は被り物を被る必要がありました。

#### 4) 男女は共に神様から出た大切な存在

でも誤解しないでほしいのは、これは男女の上下関係、優劣を示すものではないということです。だからパウロは 11 節、12 節でこのように言っています。

**11:11** とはいえ、主にあっては、女は男なしにあるものではなく、男も女なしにあるものではありません。

**11:12** 女が男から出たのと同様に、男も女によって生まれるのだからです。しかし、すべては神から出ています。

女は男なしにあるものではなく、男も女なしにあるものではない。確かに創造の秩序から見ると、女性は男性のあばら骨から造られたと創世記には書いてあります。けれど、じゃあ今いる男性は何もないところからパッと生まれてきたか。そうじゃなくて、女の人から生み出されました。だから、男女に優劣があるわけではなく、どちらも大切な存在なのです。

なぜならば、男も女も結局は神様から出た者だからです。

神様は私たちを良いものとしてお造りになりました。だから、男であったとしても、女であったとしても、大切な存在であり、決して相手を見下したりするようなことはあってはいけないのです。

## 5) 判断しなさい

そしてこのようにパウロは男性と女性の原理原則と創造の秩序を確認した後、コリント教会の人たちに何て言うかということ 13 節。

**11:13** あなたがたは自分自身で判断しなさい。女が何もかぶらないで神に祈るのは、ふさわしいことでしょうか。

「自分自身で判断しなさい。」責任を持って、神様の創造の秩序、それぞれに与えられた役割をちゃんと理解し、それぞれの責任で判断していなさい。

「祈る場、礼拝の場でどういう風に振る舞ったらいいのか、ちゃんと見分けなさい」とそう言っています。

ここでパウロが神様からの絶対的な命令として、女性がかぶり物をかぶりなさいと命じていないということに注意していただきたいと思います。

神様が与えられた役割、創造の秩序はここまでの部分で確認した通りです。それは紛れもない真理であって、私たちはそれをしっかりと覚えなければいけません。でも新約聖書の時代と今の私たちの置かれている時代では、何が神様の栄光を損な

う恥ずべき行為なのかという常識が変わってきています。教会の中の習慣も変わっています。だからここにおられる女性の皆さんは、被り物を被っていません。

それゆえ、私たちは、聖書的な原理原則をちゃんと理解した上で、それぞれの時代にあって、神様の栄光を表すために、またそれぞれ、男性と女性に与えられた役割をしっかりと全うするために、何が栄光を表すことであり、何が恥とされるべきことなのかというのを、正しく判断して見分けていかなければならないということです。

この手紙が書かれていた時代の自然な価値観というのは 14 節 15 節に書かれています。

**11:14** 自然そのものが、あなたがたにこう教えていないでしょうか。男が長い髪をしていたら、それは彼にとって恥ずかしいことであり、

**11:15** 女が長い髪をしていたら、それは彼女にとっては栄誉なのです。なぜなら、髪はかぶり物として女に与えられているからです。

当時は、男性が長い髪をしていたら恥ずかしい事をしている。女性が長い髪を持っているのは、神様からの恵みのかぶりものということであり、とっても良いものとして理解されていました。

だからこそ、その良いものを、あからさまに人に見せて、男性の目を神様じゃなくて、女性に向けさせるというのは、女性の役割としてどうなのか？っていう、そういう問いがここに込められています。

そして礼拝の場において、神様ではなくて女性の美点に栄光を当てるようなやり方は、教会の習慣としてもありえないことだとパウロは続けて言っています。それが 16 節

**11:16** たとえ、だれかがこのことに異議を唱えたくても、そのような習慣は私たちにはなく、神の諸教会にもありません。

## 結論) 現代への適用

パウロがこの箇所を通して語っている事は、「男性と女性の上下関係」ではありません。むしろ、神様が創造のときに与えてくださった秩序・役割を正しく理解し、礼拝の場でそれを尊重するという事です。

当時のコリントでは、かぶり物をするかどうかとその秩序を守っているかどうかを示す「文化的なサイン」でした。しかし、時代が変わり、文化が変わるならば、そのサインの形も変わっていきます。

大切なのは「かぶり物」そのものではなく、何が神様の栄光を表し、何が創造の秩序を損なうのかを、礼拝者が正しく判断する事です。

私たちは教会や、礼拝の場において、服装・持ち物・振る舞い・言葉遣いなど、さまざまなもので神様の前に立ちます。その一つ一つが、「神様を第一としているだろうか」「男性と女性に与えられた役割を尊重しているだろうか」「周りの兄弟姉妹の礼拝を妨げていないだろうか」と問われています。

男性は、神様の栄光を表す者として、キリストをかしらとし、その導きに従う姿を礼拝で現すことができているでしょうか。

女性は、神様が与えてくださった助け手としての尊い役割を覚え、礼拝の場でふさわしい態度をもって、それぞれが神様の栄光を表すための助け手としての役割を全うすることができているでしょうか。

あなたの服装やことばや礼拝前の時間の過ごし方、礼拝中の賛美の仕方、みことばへの聞き方、応答の仕方、それは【主】があなたに与えてくださった役割を全うし、自分が示すべき栄光を現すものとなっているでしょうか。

もう少し具体的にいうと、例えば、誰かがお祈りをしています。教会学校でお祈りをしています。その背後で「自分は教会学校の子供じゃないから」「祈っている当事者じゃないから」と言って、ぺちゃくちゃおしゃべりをしている。これは主の栄光を表す役割、助け手としての役割を果たしていることになるでしょうか。

男女の話ではないですけども、例えば自分の子供が正しく神様を礼拝できていない状態であったとして、それを放っておくことが、親として神様から与えられた役割、親として主の栄光を表す、そういうことにつながっているでしょうか。

なぜ神様が子供たちに「父と母を敬え」という秩序を命じられたのか考えてみましょう。

話を戻しますが、パウロは、創造の秩序、神様が与えてくださった役割を確認させ

た上で、「私たち男女は、互いなしには成り立」ということを確認し、それぞれが等しく大切な存在であることを教えています。

男も女も、等しく神様から出た、かけがえのない存在です。どちらかが優れ、どちらかが劣っているわけではありません。だから、一方が一方を見下すようなことはあってはいけないし、逆に異性に対して不必要な劣等感を抱く必要もありません。

大切なのは、互いに必要な存在であることを認め、その上で、神様から与えられた役割・秩序を心に留め、自分たちがどのように振る舞ったらいいかを正しく判断することです。

聖書は言います。「自分自身で判断しなさい」

現代社会は価値観が多様化し、性別に関する考え方も非常に敏感なものになっています。だからこそ私たちは、聖書に示された原理原則をよく理解し、時代の中で何が神様の栄光を妨げるのかを見分け、礼拝者として正しく判断をしてそれにふさわしい行動で示していきたいと思います。

教会、そして礼拝は、私たちの好みや文化の主張を表す場所ではなく、神様の栄光を第一とする場所です。だから、男性も女性も互いに尊重し合いながら、主の前に整えられた歩みをしていきましょう。

今しばらく、自分が教会や礼拝の場でどのように振る舞ってきたかを思い返し、御言葉に応えて、これからどのように歩んだらいいかを決心する時、応答の時を持ちたいと思います。